

選ばれる観光地を 目指して——小豆島（香川県）の取り組み——

日常を離れ、絶景や食を堪能する旅の魅力に加え、いま観光地の自然や環境、地域社会に配慮・貢献する旅行のあり方が注目されている。
観光の国際認証機関に2年連続で選出後、シルバーアワードを受賞した小豆島の「選ばれる観光地」に向けた取り組みを紹介する。

サステナブル・ツーリズムと国際 認証機関

国連世界観光機関（UNWTO）は、持続可能な観光の実現には「訪問客、産業、環境、受け入れ地域の需要に適合しつつ、現在と未来の経済、社会、環境への影響に十分配慮した観光」が重要だとしている。こうした考え方の普及により、「持続可能な観光（サステナブル・ツーリズム）」が世界のトレンドになりつつある。いま観光地ではオーバーツーリズム（観光公害）が問題になるなか、旅行者の配慮ある振る舞いや消費行動が求められている。

国際的な認証機関として、持続可能な観光の国際基準の制定や管理を行っている非営利団体「グローバル・サステナブル・ツーリズム協議会（GSTC）」がある。そして同協議会から認定を受けた「グリーン・デスティネーションズ（GD）」が観光の国際認証団体になっている。

オランダに本部を置くGDは「持続可能な観光地TOP100選」の選定と、「観光地向け表彰（アワード）および認証制度を実施している。『TOP100選』と『アワード』『認証制度』についてふれておこう。

GDが定める持続可能な観光に関する指標は、六つのセクション①「観光地管理」②「自然と景観」③「環境と気候」④「文化と伝統」⑤「社会福祉」⑥「ビジネスとコミュニケーション」で構成され、全84の評価項目がある。それぞれの達成度合いについて審査される。TOP100選に初参加する地域は15項目・60%以上の準拠、2年目は30項目・60%以上を準拠しなくてはな

らない。さらにエントリーした地域の「持続可能な観光に関するストーリー」（取り組み）を英文で提出する。

つぎにアワードと認定制度は、84項目の達成度60%以上がブロンズ賞、70%以上がシルバー賞、80%以上がゴールド賞、90%以上がプラチナ賞。そして100%で認証となる。2年ごとに審査があり、仮に受賞していたとしても達成度いかにによって格下げになったり、取り消されてしまったり、ということだから厳しい。

小豆島の持続可能な観光地づくり

コロナ前、小豆島の観光客は年間約100万人。ときに島内を走る路線バスは旅行者であふれ通学や通院に支障をきたし、観光スポットの周辺道路も混みあふ状況だったようだ。だが2020年の春以降、事態は一変した。コロナの蔓延に伴い観光客は激減した。観光産業はもとより社会全体が水底に沈んだような時期だった。

そのころ観光庁の「日本版持続可能な観光ガイドラインモデル事業」の参加要請の話が、小豆島を構成する二町の小豆島町と土庄町にきた。そこには「2021年版世界の持続可能な観光地TOP100選へのエントリー」や、「GSTCトレーニングプログラムの実施（研修）」の参加、「JSTS-D」に基づく地域の現状の自己分析（JSTS-D：日本版持続可能な観光ガイドライン）などがあつた。

5年前のコロナ禍から今日まで、持続可能な観光地づくりに取り組んできた小豆島町商工観光課（当時）の片岡琴未さんはこう話す（写真）。

「コロナ禍を乗り越えた後、この島をどんな観光地にしていかなければならないか、思いをめぐらせていました。2025年には大阪・関西万博、そして瀬戸内国際芸術祭の2大イベントが控えていましたから。ただ、多くの観光客が来てくれればいいというのではなく、国内外の『責任ある旅行者』（※）に選ばれる観光地になりたいと……これは後に策定した観光ビジョンにも反映されていますが、小豆島町の大江正彦町長、土庄町の岡野能之町長の考えでもありました」

観光庁のモデル事業をきっかけに持続可能な観光地づくりに大きく舵を切ることになった。孤軍奮闘してきた片岡さんだが、2023年度からオール小豆島として観光窓口が一本化されたことを機に土庄町商工観光課の岡田恵麻さんと（一社）小豆島観光協会の松田美夜日さんが加わった（写真）。

持続可能な観光地づくりは加速し、小豆島初の「小豆島観光ビジョン」の策定、そしてシルバーアワードの受賞につながっていく。同アワードは小豆島町・土庄町・小豆島観光協会の三者が連携して申請し、複数の自治体として受賞した国内初の事例になった（次頁図1参照）。



〈写真〉
向かって左から岡田恵麻さん 片岡琴未さん 松田美夜日さん

〈写真〉特別天然記念物「宝生院のシンバク」



評価結果で見えた課題

シルバーアワードの評価結果を見てみよう（図2参照）。①「観光地管理」②「自然と景観」③「環境と気候」の三つは、指標の完全準拠と一部準拠が約半々。④「文化と伝統」はほぼ完全準拠。⑤「社会福祉」は18項目中、完全準拠11項目、一部準拠7項目。⑥「ビジネスとコミュニケーション」は12項目中、完全準拠4項目、一部準拠7項目。

評価結果が高い④「文化と伝統」は、中山千枝田（表紙写真・小豆島町提供）の保全活動や「シンバク保存活用計画」（特別天然記念物宝生院）（写真左・土庄町提供）の継承などが評価された。しかし「準拠しない」はないものの、環境分野の対策と事業者の巻き込みの強化が課題として浮き彫りになった。

「いま環境分野では、電動シェアサイクルの

普及やEVスタンドの無償供与、パークアンドライドの推進を図っています。脱炭素化は徐々に動き出したところです。GDセクションの③

『環境と気候』には20項目がありますが、特にエネルギー分野が今後の課題です。また、事業者には積極的に行政から働きかけ、GSTC研修などの参加者を増やしていきたいと考えています」と片岡さん。

GD指標が示すとおり、観光には多くの多面的要素が含まれている。「環境と気候」だけでも土地や水の管理、廃棄物処理とリサイクル、エネルギー関係や気候変動の適応など様々だ。行政各部局間での情報収集や共有はもとより、事業者の理解や協力を得るための説明や調整には根気強い対応がなければ務まらない。

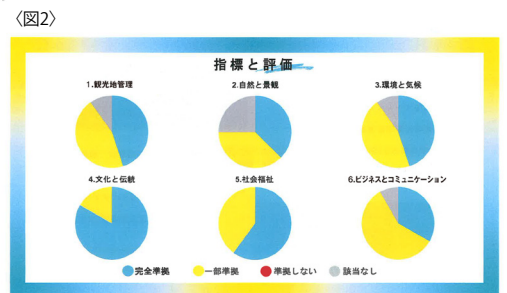
選ばれる観光地として

小豆島の観光ビジョンは「観光により消費される島ではなく、観光により持続できる島を目指す」を掲げている。「地域資源を生かして旅行者を受け入れ、地域経済を発展させると同時に自然環境や伝統文化を守る。そして『そこに暮らす人々』の未来にも十分配慮した観光のカタチ」を実現したいと片岡さんは心をひとつにする。

選ばれる観光地——その思いを聞いた。（片岡さん）「観光事業者さんをもっと巻き込み、持続可能な観光地として盛り上げていきたい。さらに上のアワードを目指して『責任ある旅行者』の方たちに来てもらええる島になればと思っています」

（岡田さん）「役場内の調整に努め、異動があった場合でも後任がスムーズに引き継げる環境を整えて維持・発展させていきたい。この取り組みを通じて感じたことは、島の人の温かさ……その魅力を旅行者の方にも味わってほしいです」

（松田）「私は東京から移住してきました。小豆



島のサステナブル・ツーリズムに共感したことが理由です。移住者の視点を生かし、この島の良さをアピールしていきたい。観光協会では住民の方を対象に観光ガイドを養成しています。すでに中山千枝田では有償で実施しています。こうした観光客との交流活動を広げていければ地域経済の好循環につながると思っています」

2024年の日本人の国内旅行消費額は約25兆円、インバウンドを含めると約33兆円に上る。この数字が示すとおり、観光を取り巻く消費額は大きい。持続可能な未来への選択としての観光——UNWTO「責任ある旅行者になるためのヒント」(*)はこう掲げている。

〇旅先に住む人々に敬意を払い、私たちの共有遺産を大切にしよう

〇私たちの地球を守ろう

〇地域経済をサポートしよう

〇安全な旅をしよう

〇旅先の情報に通じた旅人になろう

〇デジタルプラットフォームをうまく活用しよう

〇観光をより良い方向に導き、他の旅行者のお手本になろう！

（取材・原田修身）

*「tips-for-travellers.pdf」: <https://unwto-ap.org/wp-content/uploads/2021/12/tips-for-travellers.pdf>